

**[成果情報名]**イチゴ収穫株から発生したランナー子株を利用した無育苗栽培技術

**[要約]**イチゴ「紅ほっぺ」の高設ベッド栽培において、収穫を終えた株から発生したランナー子株は、隣接する株間に植え付けることで、次作の生産株とすることができる。本栽培法は慣行栽培で行うポット育苗が不要で、育苗作業の省力化が可能となる。

**[キーワード]**イチゴ、ランナー子株、育苗、無育苗栽培、省力

**[研究所名]**島根農技セ・栽培研究部・野菜グループ

**[代表連絡先]**電話 0853-22-6993

**[区分]**近畿中国四国農業・野菜

**[分類]**研究・参考

---

**[背景・ねらい]**

高設ベッド栽培による促成いちご栽培では、収穫作業と育苗作業が重なることから、その省力化が課題となっている。そこで、育苗作業の省力化を目的に、収穫を終え、据え置いた株（以下、収穫株）から発生するランナー子株を活用した無育苗栽培法を開発する。

**[成果の内容・特徴]**

1. 本栽培法は、イチゴ「紅ほっぺ」の収穫株から発生したランナー子株を次作の生産株として利用する方法である（図1）。
2. 用いるランナー子株は2～3葉期の2～3番子苗とし、7月中旬～8月上旬に収穫株と収穫株の間に植え付ける。その際、収穫株はランナー発生を促すため、予め葉を刈り取っておく。
3. 植え付け時期は遅いほど頂花房開花期が早く、年内収量が多くなるが、総収量は植え付け時期の早晩で大差ない（図2）。
4. 子株が活着した後はランナーを切り離し、収穫株を撤去する。また、展開葉は9月上旬まで3～5枚に揃えると生育が斉一化する。
5. 給液 EC(dS/m)は収穫終了後から0.2～0.3とし、収穫株の草勢維持と子株の活着を促す。花芽分化確認後は慣行栽培の給液濃度に戻す。
6. 植え付け後のランナー子株は収穫株と繋がっており、速やかに発根、活着する。また、既存の自動給液装置を使用することにより、手かん水やミスト散水などが不要となる。
7. 現地生産者がイチゴ「紅ほっぺ」において、本栽培法を試験的に実施したところ、慣行栽培の育苗と定植にかかる労働時間に対し、労働時間が57%省力できた（図3）。なお、収穫始期は慣行栽培と同程度であった（データ略）。

**[成果の活用面・留意点]**

1. 本成果はイチゴ「紅ほっぺ」の高設ベッド栽培（有機培地、掛け流し式）に適用できる。
2. 培土は、減量分を補充することで、5年程度交換せずに使用することができる。
3. 病虫害防除は収穫株撤去後に十分に行う。
4. 本栽培法における「ランナー植え付けから切断までの期間」は、農薬取締法における農薬使用基準の使用時期である「育苗期」ではない。このため、農薬使用には十分注意する。

[具体的データ]

図1 無育苗栽培法と慣行栽培の作業比較

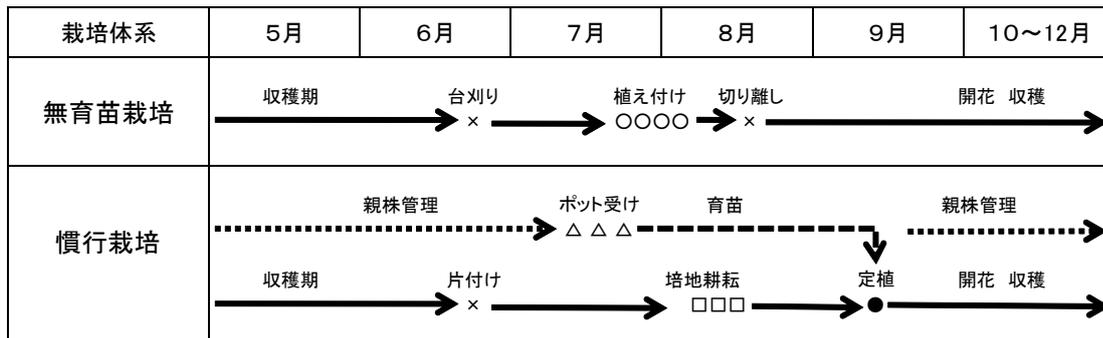


表1 無育苗栽培法の植え付け時期が頂花房開花期に及ぼす影響(2008)

植え付け期	頂花房開花期(月/日) <sup>2</sup>										
	~10/20	10/21	10/26	11/1	11/6	11/11	11/16	11/21	11/26	12/1~	平均
7月20日						●●	●●	●●●●	●●		11/21
8月1日			●			●●●●	●●●		●●		11/15
8月10日	●●●●	●●●●	●●●	●●		●					10/29
慣行栽培区			●●●●●	●●●●	●	●					11/2

<sup>2</sup>各処理区とも10株調査 ・供試品種「紅ほっぺ」

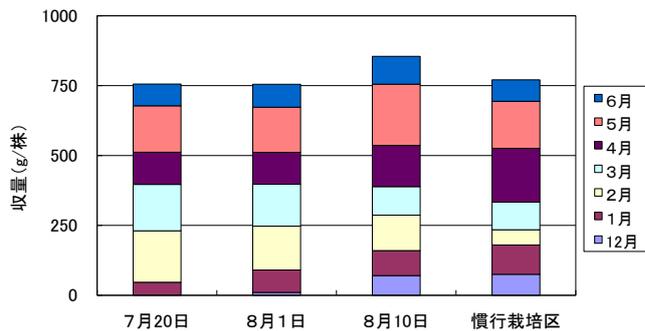


図2 無育苗栽培法の植え付け時期が月別収量に及ぼす影響 (2008) 供試品種「紅ほっぺ」

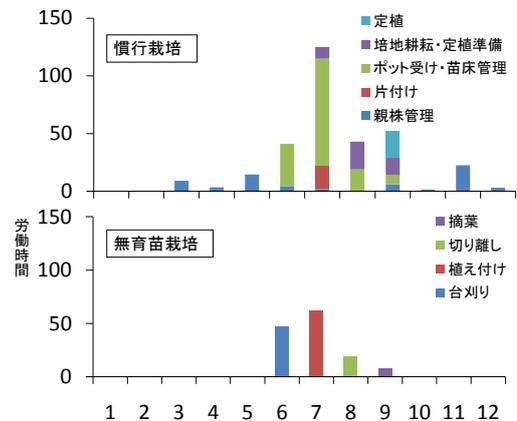


図3 現地生産者における月別労働時間の比較 (2008)

・上図 慣行栽培: 収穫終了~花芽分化期  
 ・下図 無育苗栽培: 親株管理~定植  
 ・供試品種「紅ほっぺ」

(金森健一、笹川悦世)

[その他]

研究課題名：イチゴ未分化苗定植法の確立

予算区分：県単

研究期間：2006~2009 年度

研究担当者：金森健一、笹川悦世、石津文人、椋 重芳

発表論文等：金森、笹川(2010)近畿中国四国農業研究 17:25-28